

## 風

お題…風

感想文のようだった物語を読み終えて、とびうおはひとときわ強く尾びれをしならせ水をかいた。頭上にぐんと水面は近づき、まさに魚眼とたわんで大きく広がる。

向こうにのぞいた空はブルーグレーだ。破いてあけた穴のような白い雲を浮かべると、眩しさに白く脹れ上がっていた。その世界はまるでこのことルールが違う。

それにしても読み終えた物語はつじつまが合い過ぎて、ハナから全てが済んでしまったことのようなようだった。一度、誰かが咀嚼したおう吐物には「味」さえない。

そうして再びとびうおは「えい」と尾びれで水を叩いた。そのときナイフのような体は水から抜け出し、それでも未練がましくしがみつくと水滴が伝ったならひと思いに振り払う。

飛沫と碎けて散りゆく滴が残す忠告は、いつだって意地悪だ。

だから振り返ってなどやらない。迎え入れて次から次に話しかけてくる風へ、ただ自慢の胸びれを広げる。受け止め、聞き流して推力に変えると、ブルーグレーの空と併走した。さなか、蘇った滴の意地悪な忠告はこうだ。

風の話は費えるものさ。

それとも話し相手を変えてしまうかもしれないよ。

その物語はつじつまが合い過ぎていて、ハナから済んでしまったことのようなだった。そう、彼らのおう吐物などに興味はない。

そうしてとびうおは自分の物語に、まだ何ひとつ済んでいない物語に、その身をさらす。そこにつじつまの合う結末などありはせず、無理にでもあてがえばただ不自然でしかなかった。

すると胸びれをはらませていた風が、とびうおへと笑いかける。

行き先なら私に任せて。

とびうおはうなずき返す。

落ちた影が水面を、分身のように走っていた。

## 緑

お題……緑

落ちた影の行く先は、水平線の彼方にあるように思われた。追跡すべくのもぞかせた潜望鏡の先で、彼は波間へ目を光らせる。

水面を裂いて飛び上がったとびうおは胸びれにはらませた風に乗れ、空高く舞い上がる。とずいぶん前から潜望鏡の狭い視界を抜け出していった。上層部は先回りしろとうるさいが、傍受する風の話は自由気ままで先が読めない。読めないならトビウオの行く先も知れず、事はそうたやすく運ぶようなものでなかった。

「一体、どこへ向かっているんでしょね。着地点さえ分かれば確保も容易いのに」

手立てを失い持て余した時間をつないで誰かが、何ら解決しそうにない疑問を口にする。

「分かっていたら、俺たちの出番こそないよ」

いつものことだと別の誰かもあしらっていた。

「因果な商売だね」

「そういうものさ」

「我々はいつ、この任務から解放されるのだろうか。家の者がうるさいよ」

「くさることなかれ、諸君。我々はいつだって解決してきたじゃないか。そう、空と海が混じることなく住処を分けるようにね。何より我々が安全を体現している」

「いや」

彼が冗談のような声を上げたのは、その時だ。

「いっそ、とびうおを撃ち落とせばいいのさ」

それが誰もを驚かせたことは言うまでもない。

「行き先が分からないなら、俺が決めてやる。境界を越えた無法者に教え込んでやるんだ。それで全ては解決する」

そもそも魚は水中を泳ぐものであって、滴の話を聞いたところで風の話に身をまかせするなど許されることではなかった。だからして理解し難く混乱は訪れ、そうして苦しめられているからこそ彼の言う攻撃の正当性は否定し難いものとなる。いや非の打ちどころがなかった。

「排除だ。今日こそ引きずり下ろしてやる！」

言う声が、ことのほか大きく響く。

それからの動きはとにかく素早い。彼は迷わず艦の浮上を命じ、もちろんそれは彼にとっ  
て初めてのことだったが、気圧され仲間も何の権限もないその指示に動きだす。すぐにも

タンクから水は吐き出されて艦は浮上を始め、あいだにも彼は掴み上げた銃をたすき掛けと体に沿わせた。

やがて船体は波間をかき分け、クジラのようにのっぺりした背を白昼に晒す。

「こんなことをしてもいいのか？」

そのとき吐いた誰かの言葉はもう手遅れで、今まで聞いたどの言葉よりも間抜けと響いていた。だからして彼の手ももう、頭上へ伸びる梯子を掴んでしまっている。梯子もその気で彼を待つと、外へ向かい伸びていた。

「この行為は究極だ。まっとうして賞賛されこそすれ咎められるはずもない」

言い放った彼がグイ、と体を持ち上げる。梯子を蹴り上げ抱く意思そのものと、固い音を誰もへ浴びせた。

上り詰めたそこでハッチを開く。海の香りは吹き込んで、波の音とはちぐはぐな空は彼の視界一杯に広がった。真上なら潜望鏡からでは見えまいて。彼はそこに飛ぶとびうおの姿を、初めて肉眼で確認する。胸びれを広げ堂々としたその姿はまったくもってふてぶてしかった。

睨みつけ、艦上へ躍り上がる。背に回した銃を手繰り寄せた。肩紐から体を抜いてその先端を確かめる。そこには緑色のモリが一本、セットされており、奥までしっかりとりはめ込

まれたそれに不発の心配こそないと思われた。

否や、銃床を肩へあてがう。

開いた両足に体重を乗せ、彼はとびうおへ狙い定めた。

引き金を絞った瞬間の反動はことのほか大きい。鈍い音と共にモリは空へ飛んでゆき、その尻につなげられたロープが鮮やかと空へ緑の線を引いて伸びた。

安全で「自由」を撃ち落とせ。

手ごたえは十分だ。

ピンとロープがはりつめる。彼は胸びれにはらませた風ごととびうおを手繰り寄せた。縮む互いの距離に比例して追い続けた影は波間を後戻りし、やがて艦へ黒く乗り上げてくる。そのとき連なり、とびうおが飛んでいた空もまたグラリ、彼へと傾いた。

果たして空が落ちるなど誰が想像していただろうか。だが彼は怯まない。安全とは、そういうものだ。

傾きたわんだ空がやがて底を抜く。粉々に砕けてとびうおと共に艦へ、ガラス細工と降り注いだ。それきり果てまで止まることなく折れて崩れて、紙屑のように降ると次々、価値を失くしてゆく。

溺れて足元でとびうおが、銀色の体をしならせ跳ねていた。

息苦しげなそのエラに、彼の頬はザマアミロと緩んでゆく。  
もろとも世界を、緑のロープで縛り上げた。

縛った緑でそこに新たな水平線を引き、分ける。

空と海が混じることなく住処を分けるように。

緑に死の匂いがまた染みこんだ様子だ。

平和が一際、その色を濃くしていった。

## 休日

お題：休日

落ち着き所のいいところを探して彼の体を枕にする。セックスが終わった後の彼はいつもそうだ。急転直下で眠りについて、気づけば深い寢息に身を任せていた。

緩みきったそのリズムを耳に、わたしはそろり、仰いで微笑む。

間抜けた顔。

思わざるを得ない。

半開きの口は今にもイビキをかきそうだし、同じように力を失い緩んだ眉間は子供みたくに無邪気と開き切っている。閉じたまぶたは微動だにせず、唇だけが時折、所在なさげに動いて何かを求めていた。かと思えば詰まった鼻が大きな音を立て、息が止まったのかと思うほどピタリ、止む。

七面相に声をひそめて笑っていた。なによりそのひとつひとつが可愛いくて仕方なくなる。過ぎた無防備に放っておけないイタズラ心もくすぐられるけど、それこそやってはいけないことと我慢のしどころだろう。眺めるこのひと時も楽しみのひとつなら、起こしてしまうなんてもったいなくて、つまらなさすぎて、気が利かない。



昨日、彼は、空飛ぶ異端者を射落とした、とわたしに話し聞かせてくれた。成し得た快挙にひどく興奮した様子で、わたしにだってその意味くらい理解できる。けれどそんな一大事の真偽をわたしは確かめることができない。

今日は休日。

新聞もお休み。

本当の話なら、きっと明日、センセーショナルな見出しで彼の話は世界中へばら撒かれることだろう。

そんな男と、わたしは寝た。

夢の中で成し遂げた偉業を声高と叫んでいるのか、見つるめる先でまた口元が舌打ち動く。かと思えば揺り起こされたかのような唐突さで、彼は不意に目を覚ました。そうしてすぐ打つ相槌には、まるで聞いていなかった話話を誤魔化すような性急さがある。眠ってしまったことを取り繕っているのだ。いや、腑抜けたあの顔を取り繕っているのかもしれない。分かれれば寝顔もこれまでだった。

見て見ぬフリもわたしの役目なら、彼の望む通り時間をつなぐと話を切り出してあげることにする。

「ねえ、あたしが女じゃなかったらどうしてる？」

脈絡こそいらぬのだから、彼が素っ頓狂な顔を向けたとしてそれ以上、付け足す言葉も何もない。だからして見つめ合えば、やがて彼にもそれが他愛もない思い付きだと知れた様子だ。言われた通りを思案するまま、天を仰いでみせた。先ほどまでとは打って変わって、意思を宿した唇でこう告げる。

「こんなところで寝転がってないで、相棒にして銀行強盗にでも行ってるね」

指揮をとるように、回した腕でわたしの肩をポンと弾く。

そんな解答は卑怯だ。わたしは思わず目を輝かせていた。

「銀行強盗？」

「一生分の金を三十分でちようだいする」

馬鹿げた大胆さが彼らしい。

「なら、あたしは運転手？」

ハンドル片手に背後を伺う仕草を思い浮かべた。

だが違う、と彼は否定してみせる。

「いや、背後を任せる。貯金を引き出しに来た婆さんと、商談に来たスーツを床に伏せさせるんだ。その間に俺が銀行員から現金を引き出させる。もちろん誰も傷つけない。クールで紳士がモットーさ」

「休日**の**強盗紳士ね」

確かめ片眉を吊り上げた。

その通りと、彼も唇の端を持ち上げその気で返す。

そんな唇へ唇を押し付け、わたしは言っていた。

「興奮する」

そうして見せつけるのは、ついさっき押し込めたイタズラ心を映した瞳だ。

「ね、今からやりたい」

せがんで試した。

鼻で笑い飛ばす彼は繰り返す。

「女じゃないなら、だろ？」

だとして今さらな言い分だ。わたしにはもうお見通しなのだから暴いていた。

「あら、想像に出てきたのはどんなわたし？」

「スレンダーで髪が長い」

観念して教える彼の声は案の定、秘密を明かすように小さい。

わたしはそれごらん、と彼の鼻をつまんで返す。悔しげに振り払った彼に反撃されて、その胸を突き返した。参ったといわんばかり声を上げたのは彼の方だ。

「よし。俺たちの休日なんだ。存分に楽しむ！」

合図はそれだけ。

頷き返すより先に息は合って、先を争い身を起こす。

脱ぎ散らした互いの服を投げ合いながら身に着けて、鏡の前で悪党面を仕込みにかけた。準備万端、整ったなら急かさされるまま部屋から飛び出す。

銀行は、きつと動かず待ってくれているはずだった。たとえわたしたちのために動いてお金を用意してくれたとしても、明日の新聞に載る余地こそない。

今日は休日。

奪われた心のままに全てへ手を出す自由の日。

可愛い彼と車を飛ばす、奔放の一日。

## 諍・鬼畜

お題：諍い・鬼畜

何か良い物を食った方がいい。男はそんな顔色をしている。

目の前を何も言わず三度、行き来すると、一瞥してまた背を向けた。

その両肩にはそれが親しげと羽を休めている。死神を二匹連れているなんてのは、そもそも聞いたことがない話だ。いや、シチュエーションがそう錯覚させているだけか。

「昨日は何を食べました？」

問う男は振り返りもしない。

「ディナーのメインはビーフ、オア、フィッシュ？」

尻の辺りで組んだ手を、互いの指を探り合うように動かし答えを待っている。その素足にサンダルはひっかけられると、引きずり歩いて今度こそ振り返った。

「まさか、とびうおですか？」

顔を突き出し確かめる。

「いけませんね。それは、いけませんよ」

悲しげな表情だ。大げさなほど深く頭を振ってみせた。だからといって残念がっている

わけでなく、証拠にそれきり屈みこむ。伸ばした指で他人の靴ひもをつまみ上げると、面倒くさげとそれを勝手に解き始めた。

「どんなに美味くってもこの世に一匹しかない魚だ。それを食ったんじゃあ、諍いになりませぬ」

かかとを抜いて緊張にムレたソックスを脱がし、続けさまもう一方へも取り掛かる。その度に触れる指は真冬の鉛がごとく固く冷たい。生きちゃいない。思えばぬぐえぬ気がかりは、ついぞ口から飛び出していた。

「彼女は、どうした？」

車のハンドルを握っていたのは彼女だ。最後、怯えた様子でバックミラーをのぞきこんだ瞳が忘れられない。なら目も上げず、男は答えて返していた。

「ご心配なく」

どこがだ、と思わずにはいられない。

「用があるのは、あなたただけだそうですよ。今頃、家に帰っていることでしょうか」

言って、裏返り指にまわりついたソックスを振り払うように床へ叩きつける。脱がせた靴もまた、部屋の隅まで一思いに蹴り飛ばした。

「帰る足が残っていれば、ですがね」

持ち上げた顔でニヤリ、笑う。

刹那、飛びかかってやろうと力むが、やけに高い椅子の脚は踏ん張る地面から両足を遠ざけ、腰かけ後ろ手に固定された両手も、びくともしない。荒い息だけを、どうにか男へ囁みつかせる。

「何を知りたい」

単刀直入に問うていた。

「知りたい？ それが今さら何の役に立つんです」

口調は実にとぼけたものだ。そうして重みに顔を歪めつつ、靴の消えた方向から台を引きずり前へと戻った。高さもちようどと裸になった足元へあてがったなら、酷使した腰を伸ばして短くうめく。落ち着いたところで、きびすを返した。

「始まった諍いを止める術なんて、もうありやしないですよ」

目指す壁際に作り付けの棚はあり、立ち止まって男は右から左へ眺めまわす。並ぶ中から一番端の一つへその手を伸ばしていった。

「一匹しか存在しないものを台無しにした。巡っての攻防戦なんて、もう無用の長物だ」  
掴み、戻ってきたその手には、酷使されたことを示す鈍色のハンマーが頭を潰して揺れている。

「なら、何が目的だ」

「なに、この諍いのファンファーレを採取するのが私の仕事なんです」

そうして再び、足を乗せた台の前に腰を落とす。あの冷たい手のせいで縮こまった足の指を、慎重かつ丹念に、最も見栄えするよう台の上へ並べなおしていった。

一部始終に胃液はこみあげ、抵抗する術がないことを絶望的なまでに感じ取る。だからして声もまたうわずると、ただ「よせ」とだけ口走っていた。

「わたしに言わないで下さい」

並べ終えた男は身を起こしてゆく。困り果てたように肩をすくめて、提げていたハンマーの柄を肩へあてがった。そうして死神を払い落とすと執拗なまでに、並べたばかりの生白い足の指を眺めまわす。

「あなたの悲鳴を、そちら側へ送り付ける」

その目は確かに小指をとらえていた。

「それが上のリクエストなん、ですよっ」

刹那、軽く跳ね上がった体が振り上げるハンマーの重みに弓としなる。

溜め込まれた力は一息分だ。

それきり一直線と。



## 時

お題…時

それは怖い思いをしたね。

言って彼は指先で支えていたアゴを持ち上げた。テーブルの上には琥珀色の液体。いや、この部屋全てがそんな色だろうか。

それで君は、どちらへ行きたいのかな。

問いかけてくる。

どちらへ？ 頭の中で繰り返して、彼がどんな選択枝を指しているのか見当がつかず目を凝らした。

前で彼は琥珀色の液体が入るグラスつまみ上げている。くい、と音が聞こえてきそうな間合いで飲んで、残りをグラスごと床へ叩きつけた。組み替えた足がこちらへ向けなおされる。磨き上げられた靴先はただそれだけで刃物のような光を放ってみせた。

大事にしなよ。

突きつけられて体を強張らせる。

足がないのに、選ばせてやろうって言ってるんだよ。

そんな靴が欲しいとしばし眺めて、確かに履かせる足は潰されてしまったことに気づく。そう、刻めない距離に何を大事にしろ、というのか。

これはぼくのポリシーなんだ。大事にしない奴は置き去りにするよ。

言う彼の指は、またつまむものをなくしてけだるそうにアゴを支えなおしてみせた。そんな彼が見せ付ける忍耐は、おおよそ他の言う忍耐の域には達していない。

具体的に教えてもらわないと選べないよ。

慌てふためき訴えるが、彼は飲みそびれた二口目をもう通りがかりのウェイトレスへ、愛想良さげと頼んでいた。その顔が向けなおされたとして、事細かに挙げて言い含める気はないらしい。証拠に、ついさっきの言い分を物珍しげと眺めてその後、閉じたまぶたへ祈りを捧げるような白さを滲ませる。

開いたところでウェイトレスが置いて行った新しいグラスをさらった。

まあ、一杯やってゆっくりしなよ。

含まずそれを押し出し笑う。

そのとき絡めていた足は振り回すように解かれて、刃物のような靴もまた目の前から失せていった。そうして席を立った彼の仕草は芝居がかっていて、体の前へ回した腕でうやうやしくも頭を下げる。それはまるでショーの終わりを告げる挨拶のようで、きびすを返

し右、左と、立ち去る靴音を規則正しく鳴り響かせた。

そのとき確かとは過ぎ、残された琥珀色の液体を前に初めてそうかと気づかされる。僕はチャンスを逃したらしい。

そして二度と、その時は帰ってこない。

もう二度と、戻って来はしない。

大事にしなよ。

彼は言い。

僕にはまだ、その靴は似合いそうにないと思う。

## アジサイの森

お題：紫陽花・水溜り

アジサイがお辞儀して、花卉から溜まった滴は降り注ぐ。

かき分け、彼を追って分け入れれば、体はすぐにもびしょ濡れになった。

アジサイの森は独特の匂いで満たされている。薔薇や百合とは違った、青い香りだ。まるで雨の匂いだと思いきす。

なら泣けと囁かれているようで歯を食いしばった。

どこへ行きたいかと彼がたずねたのは、何もこちらの意思を確かめたからではない。そのチャンスを与えてやろう、と彼は提案しただけだった。だが気づいた時にはもう遅く、彼は尖った靴先をこの森へ向け姿をくらましている。どうしてすぐに彼女に会わせてくれと言えなかったのか、間抜けた自分が許せない。

もう一押し、入道雲のようにひときわ背の高いアジサイをかき分け、その下をくぐり抜けた。開ける視界に地平線は横たわって、手入れしたばかりのような草原が突如と目の前に青々広がる。

上を風は撫で渡っていた。

だがその果てまで、彼の姿を見つけることこそできない。  
諦めるしかない。

と、思う。

ままに一歩、踏み出した。

聞こえた音にうつむけば、靴先が水溜りを踏んでいる。今にも泣き出しそうな顔はそこに映るとあやして手を振り、水溜りもゆるくそよいでみせた。ならなおさら悲しくなつて目を閉じる。涙は一粒、絞り出したようにそこからこぼれて、靴先で弾けたそのときアジサイの森は揺れていた。揺れて「およし」と囁きかける。空も「かわいそうに」と嘆息した。慰めぐうん、と空から風は吹きつけて、その出所を示して雲も裂けてゆく。

大きな何かは、やがてそこからぬう、と姿を現した。  
滴だ。

空の涙か。

そこに景色は逆さと映り込んで、ままに草原へ落ちてくる。上で重みにゆったりたわむと、弾けて四方へ飛び散った。

その大雨のような飛沫に身を叩かれる。アジサイもかぶってばたばた音を立てた。果てに草原の真ん中に大きな水たまりは出来上がって、目を見張る。

けれど驚かされたのはその光景に、ではないだろう。何しろ水たまりの真ん中に立っているのは彼女だ。信じるかどうかは常にゆだねられていて、なら消えぬ前にと信じて彼女へ走り出す。広げた両手で抱きしめた。その体はびしょ濡れだったけれど、彼女も同じでびしょ濡れなのだからお互い様というものだ。

そんな体を預け合い、大きく息を吸い込んでゆく。雨の匂いはしない。重く頭を揺すつてうなづくアジサイが、その香りが、抜けてきた森のように僕らをそっと包み込んでいた。

## サマータイムデート

お題：七夕・羽化・風鈴

君に会いに行くために、僕は今夜も羽を養う。

包むガラス越し眺める部屋は、いつも蒼くにじんで冷ややかで、とうてい僕のモノには思えない。

開けたことのない冷蔵庫と、横たわった事のないソファ。買った覚えのない本が並んで、餌をやった事のない金魚は今日も僕と同じガラスの中でくるり輪をかくと泳いでいる。切れない電球と、止まらない蛇口の滴。テレビは点けばなしだけれど僕にチャンネル権はない。ちらつく光は青い部屋を占領して、そこにいつもドラマの主人公を住まわせていた。彼らの方が僕よりずっと大胆だ。きっと部屋の事を熟知している。

眺めて僕はガラス越し、彼らと話し、冷蔵庫を開けたつもりでコークを取り出した。傾けるフリでソファに座り、読みかけていたことにする本のページをめくってゆく。退屈したら金魚に餌をつまんで与えて、昨日は電球が切れたことにしたから、取り替えるついでに蛇口の修理もまた済ませた。

そう、今日、僕が饒舌なのは、きっと昨日のドラマのせいだと思う。しっとり濡れた紫陽

花の森の中、再会を果たして抱き合う男女は艶やかで、妖精のようにステキと映っていた。僕もあんな風にして君に会うんだと、胸がときめいたようだ。何しろそろそろ時期だと思ふ。僕の背中がそう知らせている。生えそろったなら、年に一度、吹く風に乗り遅れるわけにはいかない。

その風が、吹いてガラスがリンと鳴っていた。

音にピリリ、亀裂は走る。

そこからのぞく部屋には輪郭があつて、僕を呼ぶと夏だと囁いた。

退屈だったそこを抜け出せば、ぼくはこの部屋の本当の住人になれた様子だ。テレビが消せた。気になっていた本の背表紙を、あいうえお順に並べなおす。そうして冷蔵庫にあと何個、卵が残っているかをチェックした。金魚の水を入れ替えてやり、二度と漏れないようにしっかりと蛇口を閉めなおす。

そうして僕は自分の背中をうかがい見た。すっかり乾いた羽が、ガラスを鳴らした風を受けて小刻みと震えている。

年に一度の風なのだから君も飛び出し、同じように部屋を整理して背中を見ているはずだと思ふ。そして卵と一緒に、電球の予備を買いに出るのだ。

そこであんな風に触れ合えるだろうか。僕は自分へ問いかけた。寸分たがわずなぞれる



ように、頭の中でずっとドラマを流し続ける。

おかげでそわそわしながらドアを開いた。そこにソラは広がると、ずっと遠く星屑と街明かりを灯して、白く川もまた横たわらせている。

だけど僕は迷わない。その光のどれかひとつだ。約束通り、僕らが出会える店を知っている。

砕けたハズの鈴が、また部屋でリンと鳴っていた。

涼やかな風を受け、僕は君へと羽を広げる。

## 星空サロン

お題：天体観測・家族

「そうして織姫と彦星は、あの辺でバッチリ出会いましたとさ」

川向う、黒い帯となった木立が満天の星空を支えている。彼はその中央、埋めて伸びる天の川を指さし話を締めくくった。

けれどわたしは慌てて注意する。

「あ、もう。動いちゃダメ」

危ないところだ。何しろこちらは刃物を持っている。うっかり耳でも切ったりしたら申し訳ない。思い出したのか、大人しく腕をおろした彼はふたたび借りてきた猫のようにデッキリエアの中へ埋まっていた。

テントは万が一の増水に備え、河原からずいぶん離れた陸地に張っている。けれどどうしても涼を求めたくなくなり、水際までデッキリエアを持ち出したのは彼の方だ。そうして聞く川のせせらぎはなおさら涼しげで、紛れて転がる鈴虫の鳴き声も真綿のように心地がいい。時々ホタルも舞っているようだったが、それより彼が白熱して語るのは年の半分を過ごす宇宙《ソラ》についてだった。

「でも年に一度って、ちょっとひどすぎるわよね」

だからといって、その話に飽きたわけではない。思い付きであることは道具に準備がないのだから否めないとしても、そんな彼の襟足の長さが前から気になっていたのは事実だ。どうしても今、済ませておきたくて、わたしは話を聞きながらこちない手つきでまた彼の髪を切り落とす。

「そうか？ 彦星に何の用があったのかは知らないけどよ、一年くらい宇宙にいりゃあ、あっという間に過ぎるさ」

「待つ方はタイヘンよ」

幾らか進んだ作業に、耳の後ろ、左右の毛束をつまんで身を引いた。  
目を細める。

左右の長さに差はない。

我ながらうまいと思う。

「で、今度はどれくらい？」

その合間の、このキャンプだ。

再び彼のうなじへ前屈みと顔を寄せた。

「この方角、白鳥座のアタマ向こう」

また星空を指し示す彼は懲りない。

「あ、そのまま」

ストップをかけてわたしはクシを入れる。少しくセのある彼の髪は、きつと濡れている時に弄ったりすると素人は失敗する類だ。だからして乾いたままのそれを、つまんでねじって慎重に切ってゆく。

「白鳥座、いいメシの種が放置されてるって話さ。二カ月で行って帰ってくる」

気配を確かめ終えた彼が、途中だった話を再開させていた。

「よかった。地球《ココ》から見える方向で。じゃ、二カ月分、短めにね」

「っていうか、何も今じゃなくていいだろ？ 散髪なんて」

今さらだ。右から左へ立ち位置を変えたわたしへ抗議してみせる。だとして仕上がりの良し悪しが目立つ襟足へ集中したなら、返事は自然なおざりとならざるを得ないだろう。

「んー？ だから動かないの」

肩のラインを目安に、わたしはハサミを添わせる。切り落としてひと息ついた。

「だって景色は最高だし、涼しいし、そのうえ綺麗な美容師さんってちょっと素敵なサロンだと思わない？」

などと口から出まかせもあったが、まんざらでもないと思う。

「ま、これだけ星がよく見えりゃ、確かに最高だわな」

「星だけ？」

また見上げそうになった彼の頭が、ぎこちなく揺れ動いた。おさまるのを待って再びハサミを持ち上げる。

「それに練習。生来、子供の髪も切ってあげたいから」

付け加えて毛束へ刃をあてがった。

刹那、彼の頭は振り返る。

「コラっ」

狂った手元に、怒鳴り声もれるも仕方なしだ。切り損じたりしたら申し訳ない。もう、とわたしはむんず、と掴んでその頭を正面へ据え直す。

洩々、川面へ視線を投げ戻した彼の顔は、真後ろからでは見えるはずもない。仕方ないけれど、今の部分は最初からやりなおしだ。

「……それ、男なのかよ」

ボソリ、彼は言う。

「どっちでもいい」

答えてわたしは、チョロリ残っていた最後の長い毛束を始末した。

いつかこのサロンで家族の髪を切る。想像したところで、しばらくの間は白鳥座の向こうを眺める日が続きそうだ。それもまた、素敵な天体観測だと思いつながら。

## 花 火

お題：花火

屈める体。

背後のみぞおちをヒジでえぐる。そうしてくの字と曲がった体より先、地面へ伏せたな  
ら、軽く地に沿わせた爪先で半回転。まごつく足を払ってやった。

これで二人目か。

だというのに性懲りもなく、まだいるらしい。立ち上がった瞬間、背を押されてつんの  
める。踏み止まれば両脇を、くぐった腕に羽交い絞めされていた。だいたい抱きつかれて  
嬉しいのは美人と相場が決まっているもんだ。それがヒゲ面とくれば愛想すら振る気にな  
れない。狙いすまして四人目も、前から果敢に飛び込んで来ている。

見据えて一つ、息を吸った。

地面を蹴りつけ、背後の野郎へ支えてやがれと体を預ける。

手が出せないなら飛び来る野郎へは足で十分だ。

蹴りつけたその顔を足場に変えてさらに跳ね上がり、背後の輩を押し倒す。なら仰向  
けとなった何某の剥き出す腹は踏んでくれといわんばかりで有難く、お望み通りだ、釣り

は結構とそこへかかとをねじこんだ。

まったくロクなことになりはしない。マストロヤンニのジャケットも、おろしたばかりが台無しだ。襟を正し、袖口をそろえなおすついでに息も整える。

声はそのとき、暗がりの向こうから聞こえていた。

「……やあ、久しぶり」

出番を見計らうなど、思い及べば目を凝らすより先、笑いしか出てこない。

「ああ、確かに久しぶりだな、緑のダンナ」

闇から一步、そうして重たげな安全靴は姿を現す。連なり、たいそうな制服もまた見慣れた顔に乗せ、せり出してきた。

「まったく、メシの種にこんなところまで遠征するとはね。やっぱり空飛ぶオサカナちゃんだよ」

馴れ馴れしいのは、そういう手だ。

「言うあんたこそ、ここぞで邪魔するのが典型的な、心底いけ好かない野郎だぜ」

会話に間はなく、

「お互い、お宝目当てなんだからしょうがないでしょ」

返してその身を、開いた両足の分だけ低く構えた。瞬間、呼吸が合うのは、それもこれ



も長い付き合いのせいだからか。過ってよせや、と心の中で吐き捨てる。代わりにこちらも応えてジャケットの裾を叩いて払った。

「なら、みあう分、派手にやるしかないようだな」

睨んだ先、ほくそ笑む顔はもう闘志と遊戯を混ぜ合わせている。

「そう、オサカナちゃんと僕とでドカンと一発、デカイ花火を、ね」

プチ込むために握った拳は、力むあまりに血の気が失せていまや白い。まったくお互い懲りない者同士だ。

笑い、無言で床を蹴る。

## 長い夜

お題：長い夜

降る雨を、その見えぬ雨足を探して暗い窓へ目を向ける。ヒザの上は温かく、繰り返されるリズムはついさっき眠ったそれへとすりかわっていた。今一度、確かめ、深い寝息に膨らむ背へ触れてみる。

聞かせた話は作り事ばかりで後ろめたい。だからしてもてあまし眠ったのか、それとも思い耽り眠りについたのか。

しょせん、この世にお宝なんてありはしない。むしろ食いつぶされることがないからこそお宝は、永遠の彼方と相場が決まっている。ただ、こうやって耽る夢は虚ろでも、眠れば現実、夢を見る。夢を持たない大人は淋しく、持っただけでも信じない人間はなお悲しかった。だからして新たな視点も、その視点を信じさせることも、おせっかいが俺の役割と言えうわけだ。

そう言えば、さっきの車掌は疑わなかった。行き先の記されていない切符へ平然と切り込みを入れ「今夜はレールがたわみますから十分お気を付けてください」とほざいて揚々、立ち去って行った。手慣れた様子がしゃくに障る応対だったことを思い返す。

見えぬ雨が窓の向こうで激しさを増している。叩かれ滲んだ景色が、なおさら行き先を曖昧にして流れていた。

話し相手はもういない。嘘はつかなくてすむぶん長い夜が身に染みだ。

だが、まあ、いいってことだ。

おそらく夜のまま、列車はこの雨を裂き続けるだろう。だからして今度は自分へ聞かせる作り話をレールのたわみに合わせて紡ぐことにする。新しい視点も、それを信じさせることも、相手が誰であろうと俺の役割と矛盾しない。

やがて雨はあがり、夜もまた明け、列車が駅へついた時、目を覚ました膝の重みは与えたビジョンを追いかけてすぐにも走り出すはずだった。その別れに自らも目的を持ち歩き出せるよう、語って明かすかと長い夜へ目を向ける。

## 出 発

お題：出発

目覚めた彼女は何度も礼を言っていた。

ホームは長く、先頭車両を降りた今、その端に立つ。

改札をくぐるまでだ。世話した彼女ならどこか名残り惜しい。立ち去るまでを見送った。

「良い物語を」

と、背へ声はかけられる。

「紡がれたようですね」

車掌だ。アゴを引けば肩ごし、検札のあった昨日、今夜はレールがたわみますから十分お気を付けてください、などとキザなことを言って去った彼をみつめる。

「どうかな」

言ってもやってもかまわないと思う。なら車掌は提げたかばんも重たげに、今まさに視界から消え去らんとする彼女を指し示してみせた。

「まさか。ほら、足取りが違う。わたしはこれでも旅立つ人の足取りをごまんと見てきましたからね。間違いはありませんよ」

片目もまた閉じる。

「アンタもけっこういい話を紡ぐじゃないか」

調子がいいのか愛嬌なのか、その仕草に笑いももれる。だのに「いいえ、いいえ」と首を振って返す車掌こそ、芝居がかった。肩をすくめたその後に、持ち上げた腕をひねってこども問いかけてみせる。

「で、これからどちらへ？ 次の便までまだ三時間はありますよ。それをお待ちですか？」だが教えてしまえばそれこそせつつかれそうで、車掌の腹を試していた。

「そうだ、と言ったら？」

ホームにはもう誰もいない。走り詰めて熱を持った機関部だけが、冷えてカンカン、音を立っている。

「そう聞かれますと、こりゃ言いにくいですな。さて、わたしにもひとつ物語を、なんてね」案の定、明かして車掌は照れたように笑ってみせた。

「あなたには必要ないよ」  
迷わず返す。

「いやいや、これでも迷える子羊です」

うやうやしく頭を下げる仕草はやはり、芝居がかっていてかなわない。

「レールがあるさ」

「いやねえ、これがずっと先まで敷かれていますとすな、つい外れて走りたくなる妄想にとりつかれるんですよ。この歳になってもそのための新しいビジョンが欲しい、って願ったりするものなんです」

なるほど、どうやらこいつはとんだ不良中年らしい。思うままに眉を跳ね上げる。

「次の列車には乗らない」

おさめて真顔と返して教えた。

「ああ、そうでしたか」

車掌の相槌はえらく残念そうだ。

その場に残して背を向ける。

「で、どちらへ？」

などと再び車掌が確かめるのは、繰り出す足が改札とは真逆の方向だったからだだろう。

なら「紡ぐ者」の行く先はいつも他者の中にあり、列車に揺られて一晩、探しあぐねた己の目的地は瞬間にもひとつと定まる。

「ああ、物語ってのは」

口を開けば体ごとこちらへ向きなおったか、車掌の靴が踏みつけた小石に、ジャリ、と

音を立てるのを聞いていた。

「言葉だけで紡ぐもんじゃないってことさ」

つまり今だと見せつけて、車掌へ向かい走り出す。

「嘘か真か」

両の手もまた予兆とばかり、左右一杯、広げてやった。

「信じるのはアンタ次第だ」

などと、ちよいと助走が足りないか。だが元より端のホームはそこで切れると、柵は立っているのだからこの不良中年のためにも思い切るほかない。

力の限りにホームを蹴った。

同時にふわり、浮き上がった体の感覚を逃したくはない。羽ばたきなんて格好だけのものは必要なく、舞い上がる浮遊感だけを強く、強く、イメージする。

大丈夫だ、逃したりはしていない。

証拠に背後で「あああ」と声は上がっていた。空へ舞い上がったこの身を追いかけて、ホームを走る車掌の足音がけたたましく鳴り響く。

飛んでるよ、あなた、飛んでますよ。わたしには見える。

子供そのものと、言葉は無邪気に繰り返されていた。

振り返れば柵の向こう、落ちんばかり身を乗り出すと帽子を振る姿は見えている。

わたしには見える。

振って車掌はただ続けた。

ありがとう。見せてくれてありがとう。決して忘れやしませんから。

いやいや、いい大人がそんな風に瞳を輝かせるなんて、こっちこそ忘れられなくなりそうだ。

いってらっしゃい、良い物語を。

声が遠ざかってゆく。

いってらっしゃい、素敵なビジョンを多くの人に。

だがそれには「残念ながら」と言うほかないだろう。なぜなら俺にとっての行き先は、そこしかないのだから。